

オープンの部を制した磯風、  
漕友会。デッドヒートを制  
した（撮影・河田一成）

▼18歳以下の子供へ一律10万円を支給する公明党の選挙公約が何やら現実味を帯びてきた。といつても受け取るのは親。本当に子供のために使う親もいれば、しつかり貯蓄に回す親もいるだろう。「あざーす」とばかりギャンブルや飲み代に費やす親もいるはず。10万円から見ればこれも「親力」だ。▼18歳以下の子供は約2000万人いて一律10万円なら約2兆円になる。財源は2020年度の決算剰余金約4兆5000億円し7橋の甘口卒業



4連覇に笑顔の磯風漕友会のメンバー。  
コロナ禍を乗り越えた

越選手。たゆまぬ努力で4連覇につながった。うに、今大会で認められたダブルエントリー。つて、混合の「磯D」とW優勝。村越は2チームで、予選計6レースに出場した。半田佳彦監督は、「6レース漕ぐ選手の過酷な条件。負け仕方がないかもしれないと思ったが、2チームできることほとん

**メンバー9割が医療従事者** 多忙でも合間縫つて猛練  
した。【スタートで伸ばし、ラストでも伸ばす。】いつも練習してきたことなので、相手が長くついてきても気にならなかつた。勢いを落とさずに伸びきり、わずか0・30秒差の接戦に勝利した。新型コロナウイルス感染症の影響で、2年ぶり集まって合のせらじでも、汾瀬は自分たちのパフォーマンスに集中された10月から本格的に緊急事態宣言が解

か吹く大阪で白熱の戦いを制した。磯風漕友会が4連覇を達成。b-pとのデッドヒートに勝ち、副主将の村越友樹選手(28)が喜んだ。「本当にうれしい。連覇を意識せず、普段通りの気持ちで全て勝ちに行つた結果です」スタートからb-pとほぼ横一線でお互い譲らずにままで進行。ライバルを真横に感じて個々で練習を続け、ついで自分たちの姿を窺う。各自の目標を達成する。ボートの灯を消さないという思いを胸にこの会に臨んだ。メンバーカーが、チームは「ドライブ」という言葉を用いて、ボートの灯を消さないという思いを胸にこの会に臨んだ。メンバーカーが、チームは「ドライブ」という言葉を用いて、仕事は多忙を極め、事態宣言下で練習も通りにいかない中、ターネットを利用し、オンラインでミーティングを重ねた。そして、たちは仕事の合間にを

16チーム300人参加 新型コロナウイルス感染症の  
影響で2年ぶりに開催された。オープン、混合、スマールの3種目  
16チーム、約300人が参加して行われ、オープンは兵庫を拠点  
する磯風灘友会が4連覇を達成した。混合は磯風  
灘友会、スマーリーは東京駿府マスターズが別荘にて。